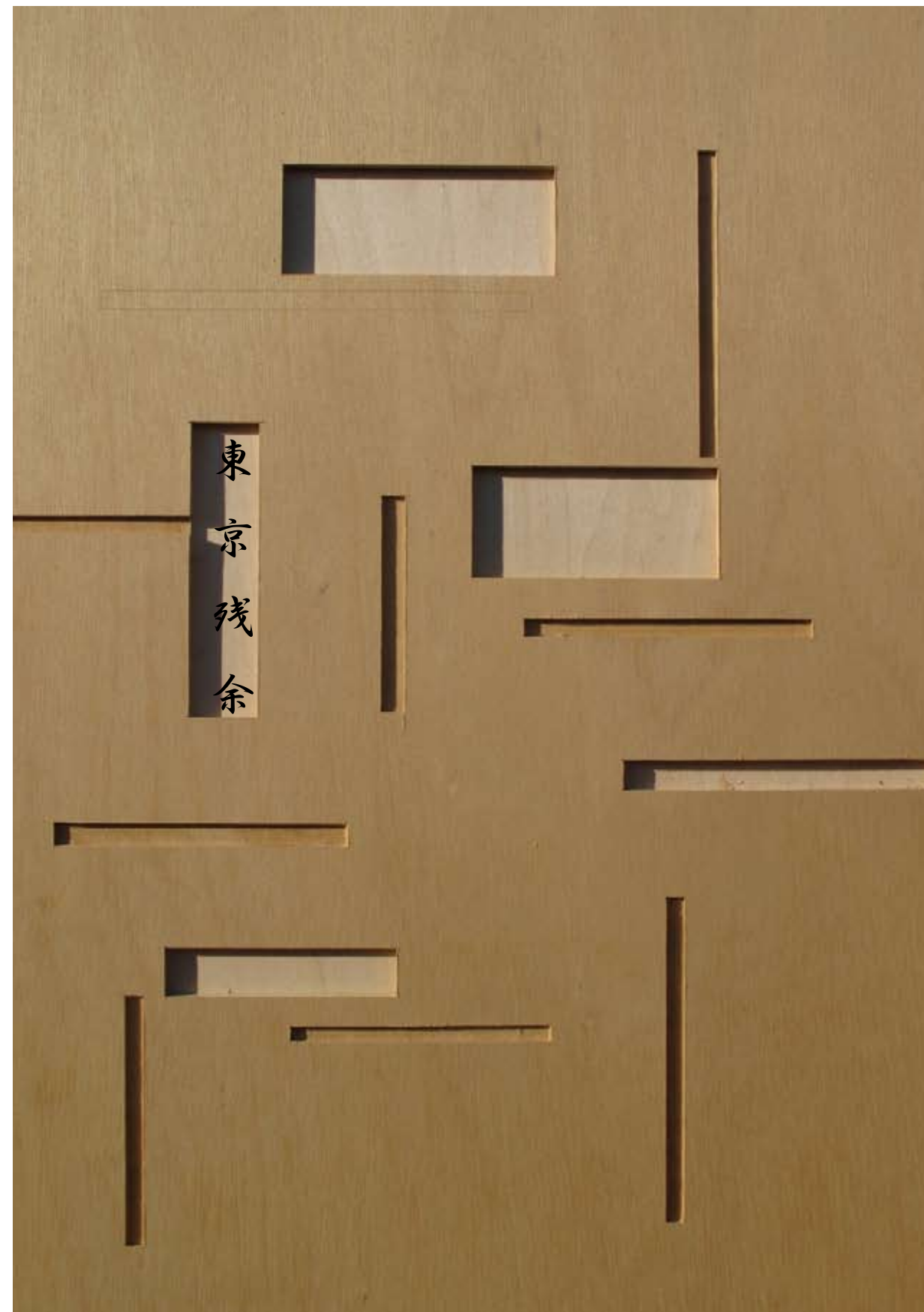


建物とは空間の中にさらに空間が在るような組織のことである。



コミュニティ然り。都市また然り。

エリエル・サーリネン

構築物は残余空間を埋めていく。R・ベンチャーリが述べたように、残余空間が都市空間の特質となり得るならば、その地域における残余性をもった建築は、都市空間を反映した建築になるのではないかと考えた。この1枚の写真は、本模型の土台となったものである。本来なら、建物が構築されることで消えていく残余空間であるが、建築を建てることで、残余空間を生み出そうという試みが今回の主旨である。

SDL 100499

initrodaction

東京などの都市において、過密という現象がもたらす渾沌とした都市形態は、否定的に見られがちである。そのため近年では、街のスケールを無視した再開発や建築規模の巨大化が顕著にみられ、都市の生態は変化しつつ在る。本計画では、そういった否定的な都市形態をポジティブに知覚させる変換装置のような建築の提案を行う。そこで、過密地域において、実際の踏査のうえで固有の都市空間を捉え直し、その都市の面白さをヒューマンスケールにで体感できるように建築に落とし込む。空間というのは本来、一つの建物だけで成立するのではなく、複数の建物およびそこに隣接するさまざまな環境の結びつきによって成立している。

そこで、残余空間に着目する。残余空間に着目することで、東京を客観的に捉える。

残余空間：2 次的に発生した場所（例：屋上、高架下、建物間の隙間、非常階段など）



路線と建物の間



建物間の隙間



高架下のアーチ

日常的な空間ではなく、残余空間から都市を眺めることで、違う視点が得られると考える。本来、脇役となる残余に焦点を当て、残余の空間構成に着目し、調査した上で、空間そのものの魅力を把握する。

隙間

ヨーロッパの都市は街区を隙間なく構成するのに対し、東京の都市は、人も入れない細かい建物の間の空間の存在が、特徴的であり、都市のコンテキストとして捉えることができる。またそれは、空間を挟んでいる建物の形状や素材に起因し、均質的な内部空間とは違う、多様性をもつと考えられる。そこで、過密という現象の後に放置された、東京における建物の間の空間を、残余の一端と捉え、調査対象とする。

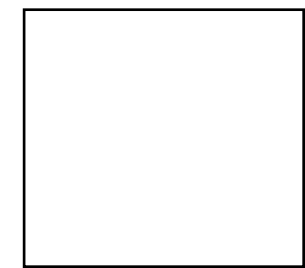


新橋駅周辺を対象地区として踏査！

隙間写真

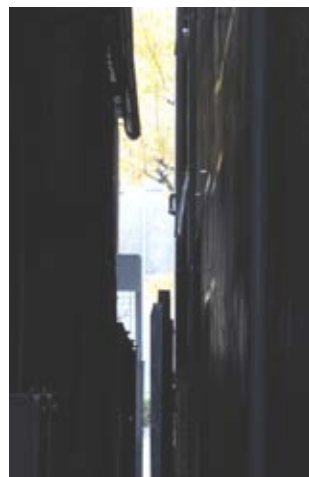


踏査によって得られた隙間の写真 1



特質として、フレーム化された空間、限定された視界が特徴的であった。そこで、視線の抜け方に焦点を当てるため、向けだけを図化して、隙間を抽象化する。

例

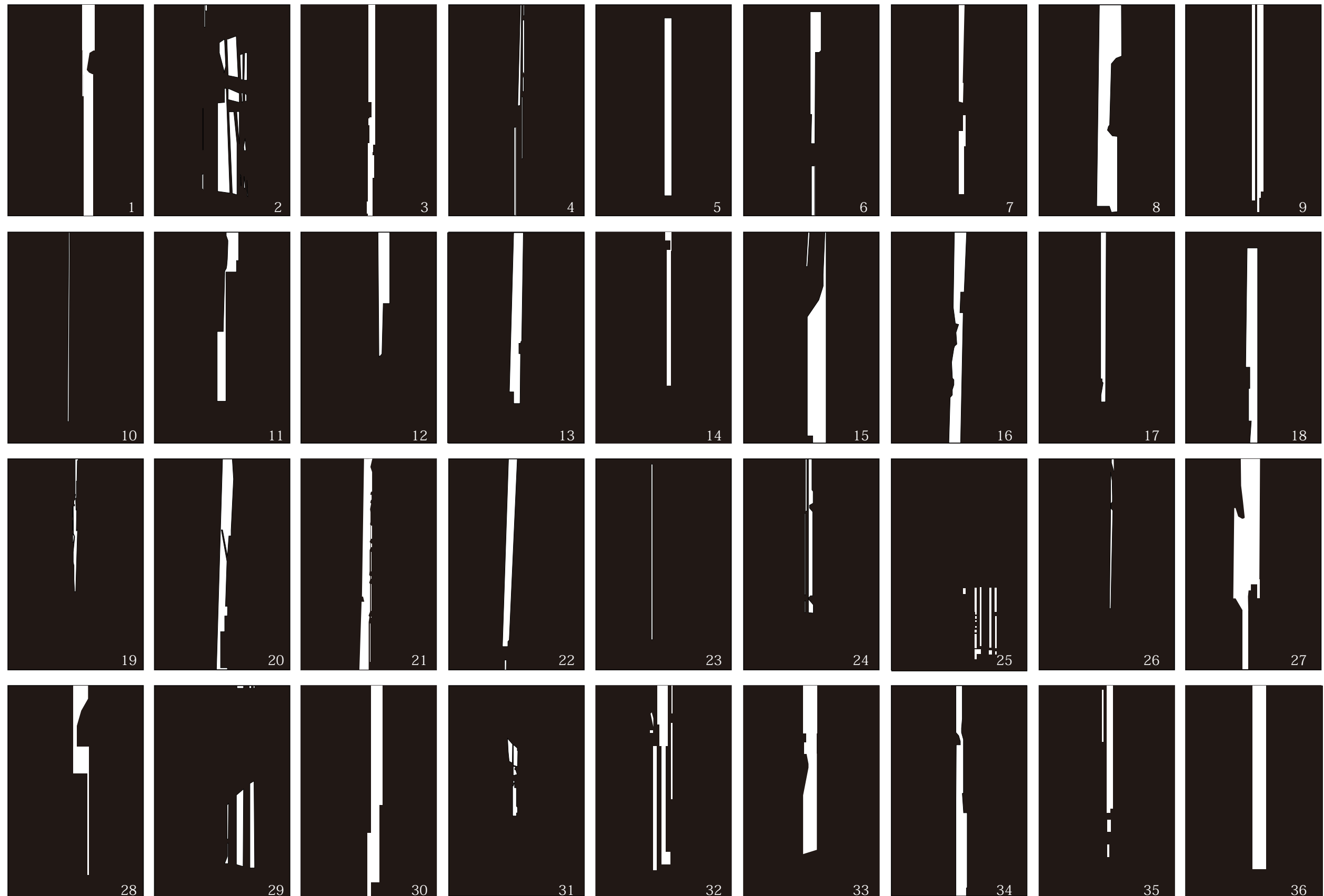


写真



形状

形状



写真から抽出した形状 1

抽出 2

二つ目の特質として、異なる外壁面に囲まれた空間が特徴的であった。隙間の狭さ、光、空気が入りにくいことから内部空間とも感じられるが、ほとんどの内部空間が一様な面で囲まれ均質なのに対し、隙間では異質な外壁面の組み合わせが空間を多様なものにしている。



素材によって、空間は変化する。

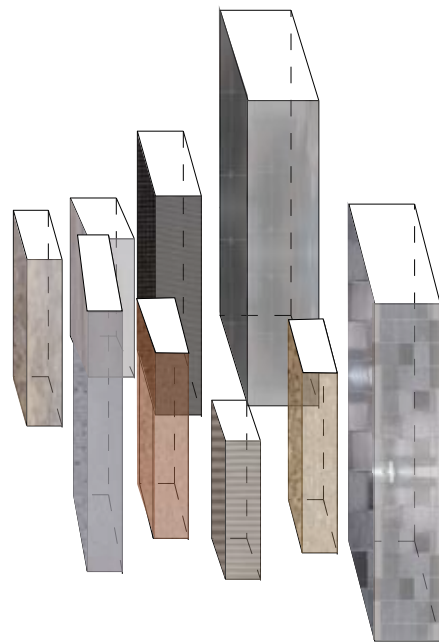
素材



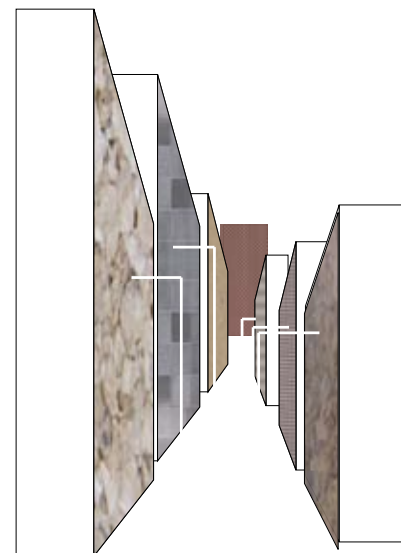
写真から抽出した素材

小結

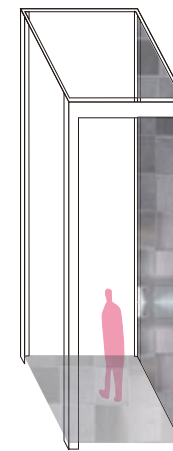
隙間を作る空間構成として、以上2点の考察をもとに設計を行う。



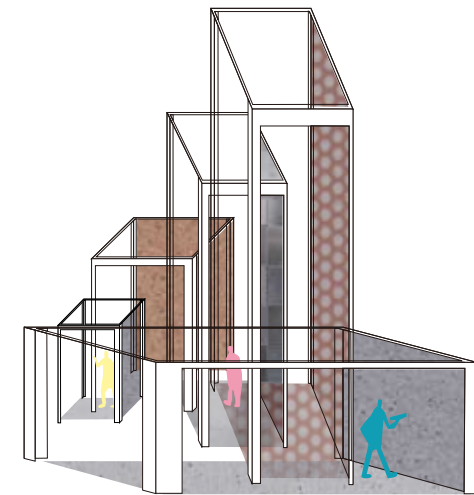
機能の集中化に伴い、副次的なものとして生まれた、都市の裏側としての残余空間に着目し、その空間構成を探る。



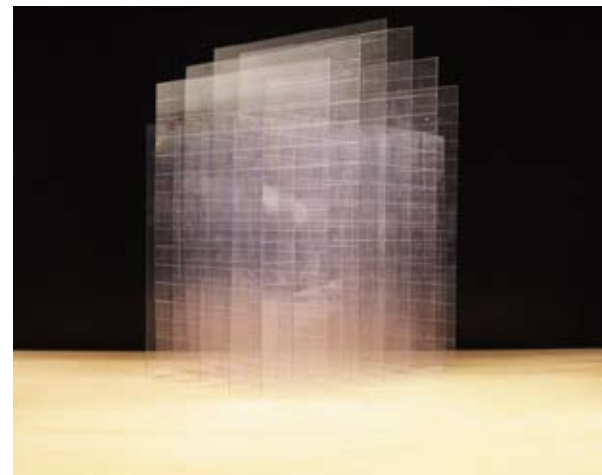
隙間という残余空間に対して起因する一面の外壁（面が作る空間）と、線分によってもたらされる視線の抜け（シークエンス）。



建築を縮小し外壁の素材とフレームによって形成される空間を一つの単位として、内部空間を構成する。



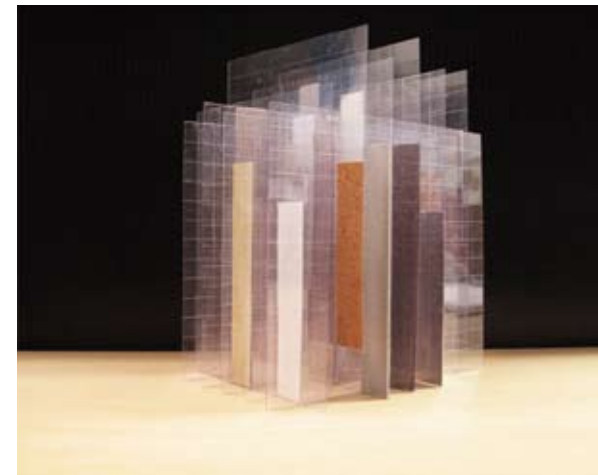
フレームの太さを変えつつ、入れ子状に組むことで、空間を他の空間が包含するように構築し全体を形成する。



フレームによる立体的な空間は、中心に行く程に密度が高まり、内部化していく。



スラブを配置する。主構造となる柱やスラブはフレームよりも厚みがあるために



面を配置する。複数の建物が集合したような建築。隣り合う異質な壁の間（隙間）



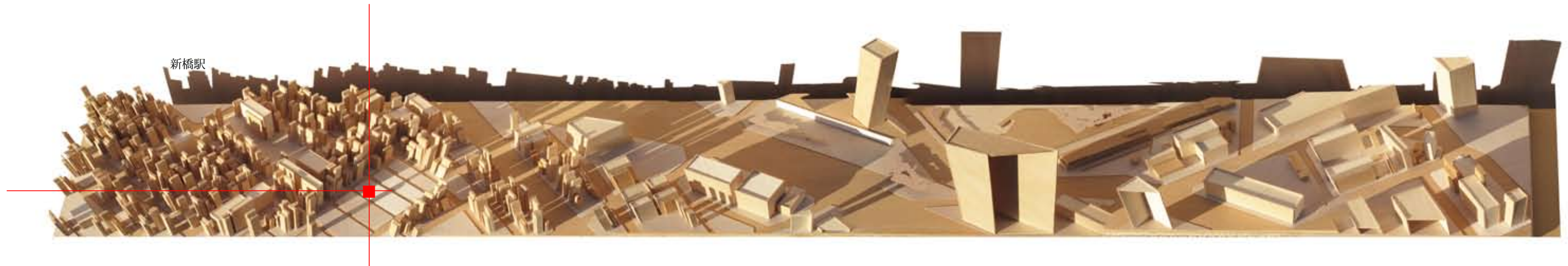
面とスラブの両方を配置する。新橋の街区を縮小し、パッケージしたような建築

site

新橋

汐留

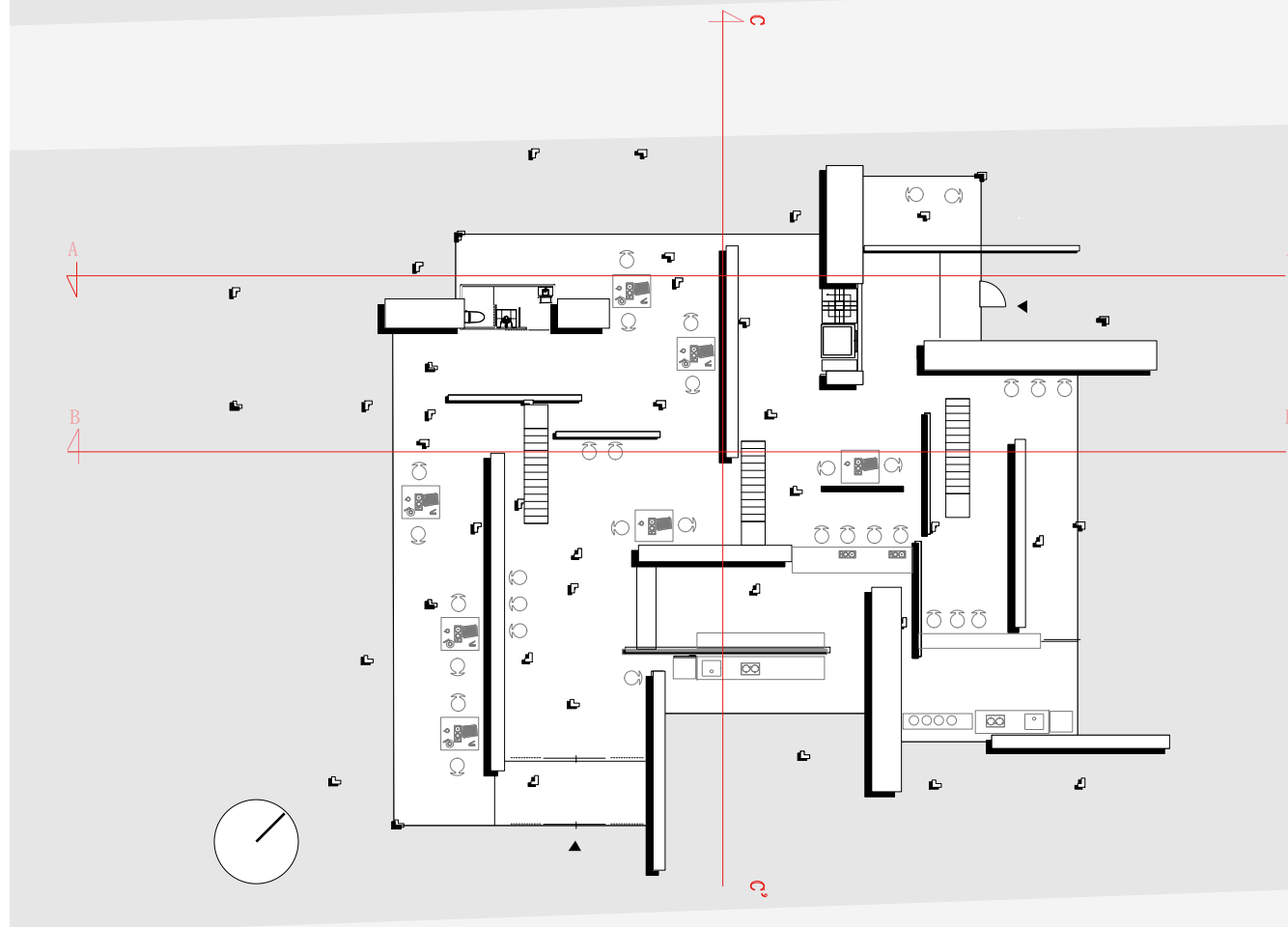
新橋駅



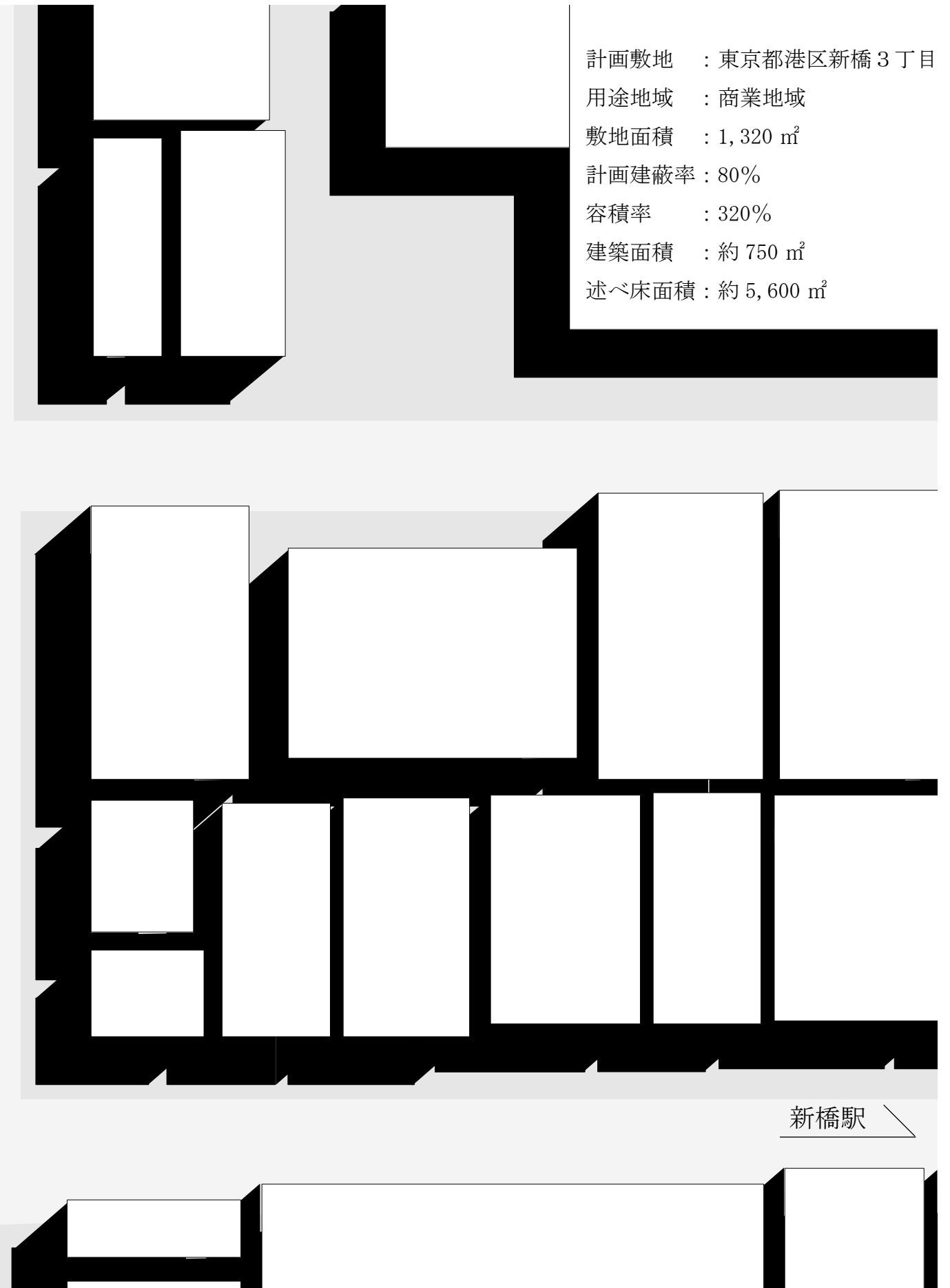
西新橋は新橋でも、間口の狭いビルが林立する地区である。周辺には、狭い空間を活用した飲み屋やネットカフェなどが目立っている。しかし、本計画地は建物の過密化に対して合理的に対処するために、現在4区画を利用した大規模な再開発が行われる予定である。この土地の1区画を利用し、なくなりつつある固有の都市空間から、残余性を持った建築の提案を行う。

汐留地区は、大規模な都市開発により、新橋地区とは異なる都市形態をしていることが伺える。新橋に残された建物の間の独特な空間は、ここでは見られずに、複数の超高層ビルの巨大化した建築が、広大な敷地孤立して建つ、複合都市となっている。隣接しているにも関わらず、新橋と汐留における都市空間は対称的に異なり、それぞれの特徴が明確な差異として現れている。

配置

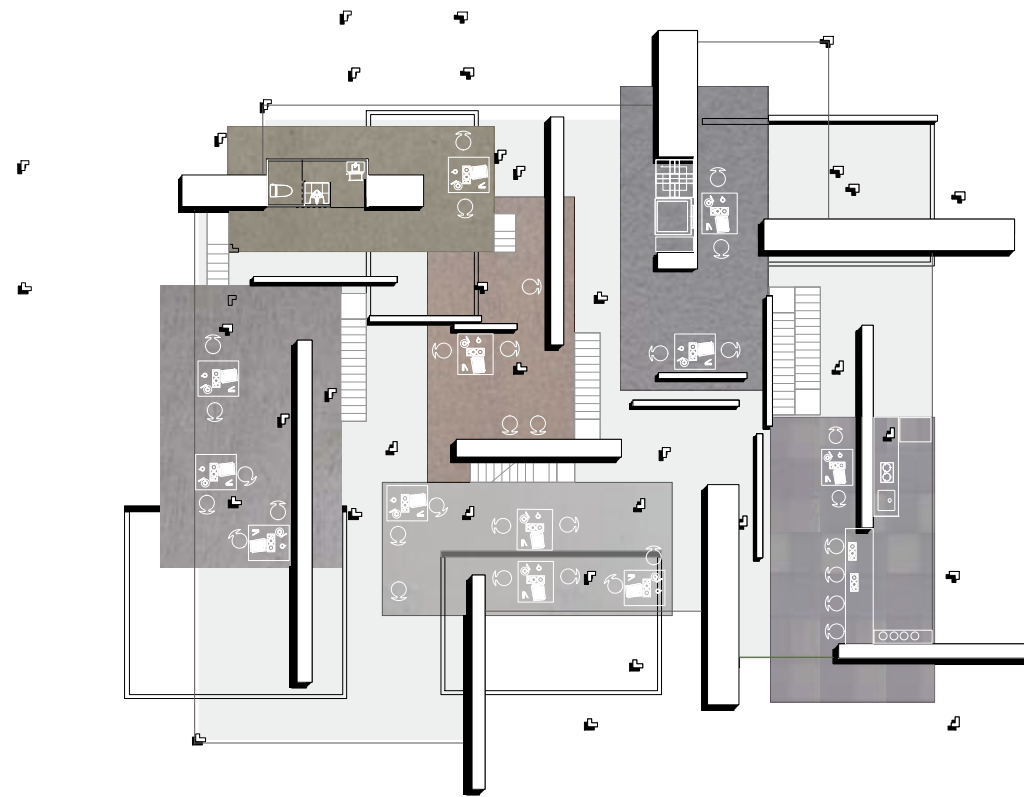


+0 S=1 : 200

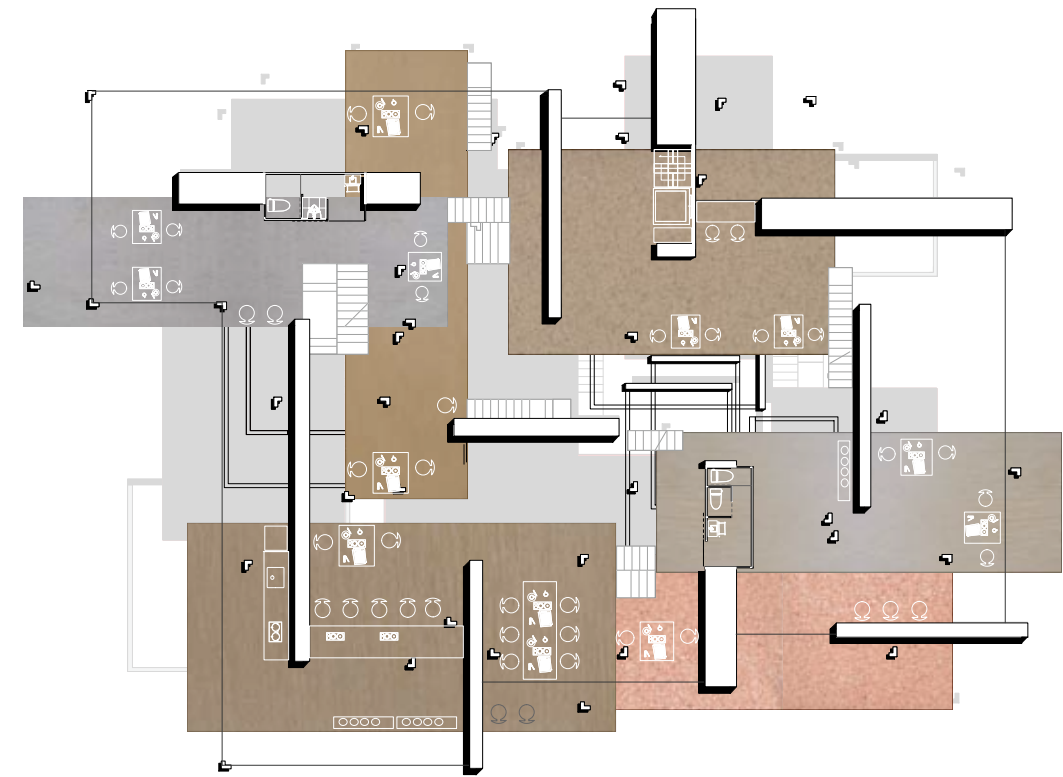


計画敷地 : 東京都港区新橋3丁目
 用途地域 : 商業地域
 敷地面積 : 1,320 m²
 計画建蔽率 : 80%
 容積率 : 320%
 建築面積 : 約750 m²
 述べ床面積 : 約5,600 m²

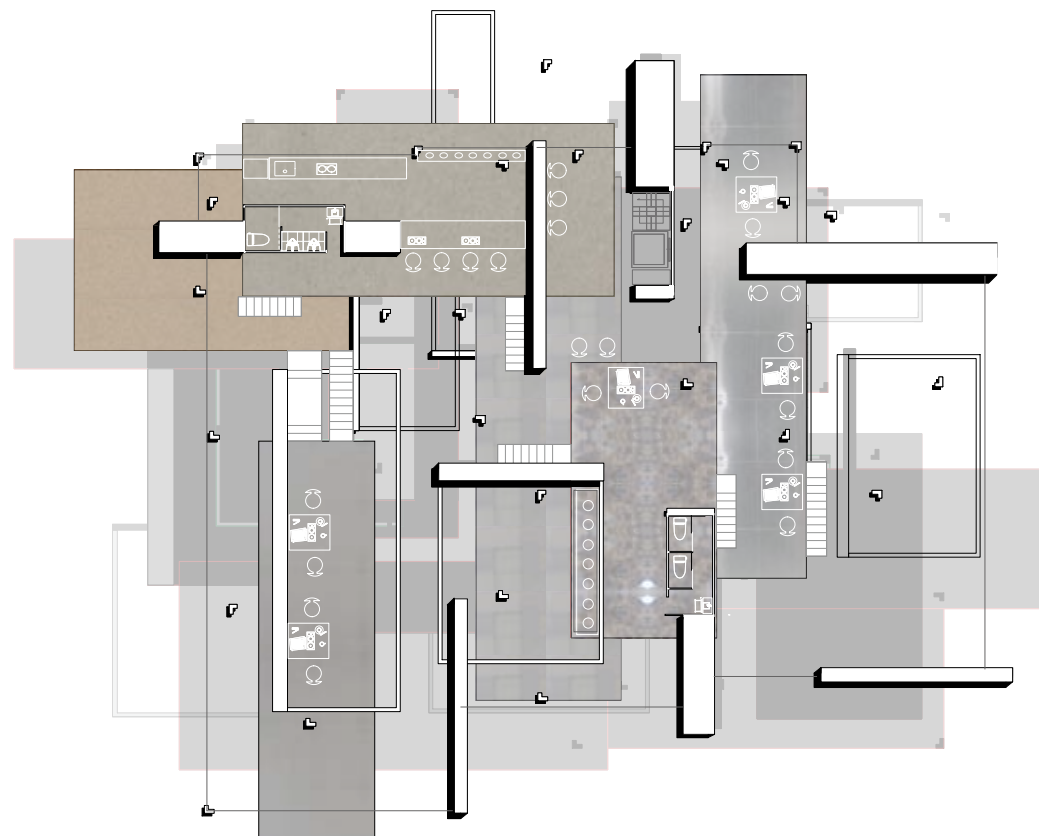
平面图



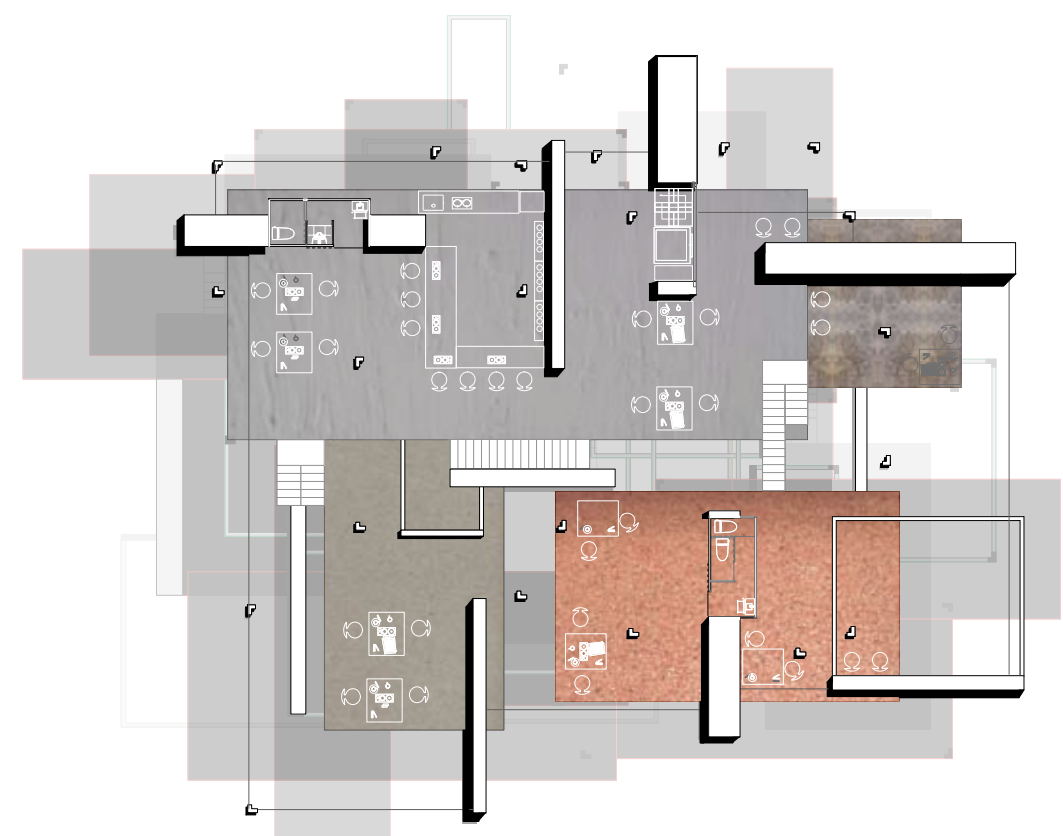
G.L. +4000 S=1:200



G.L. +8000 S=1:200

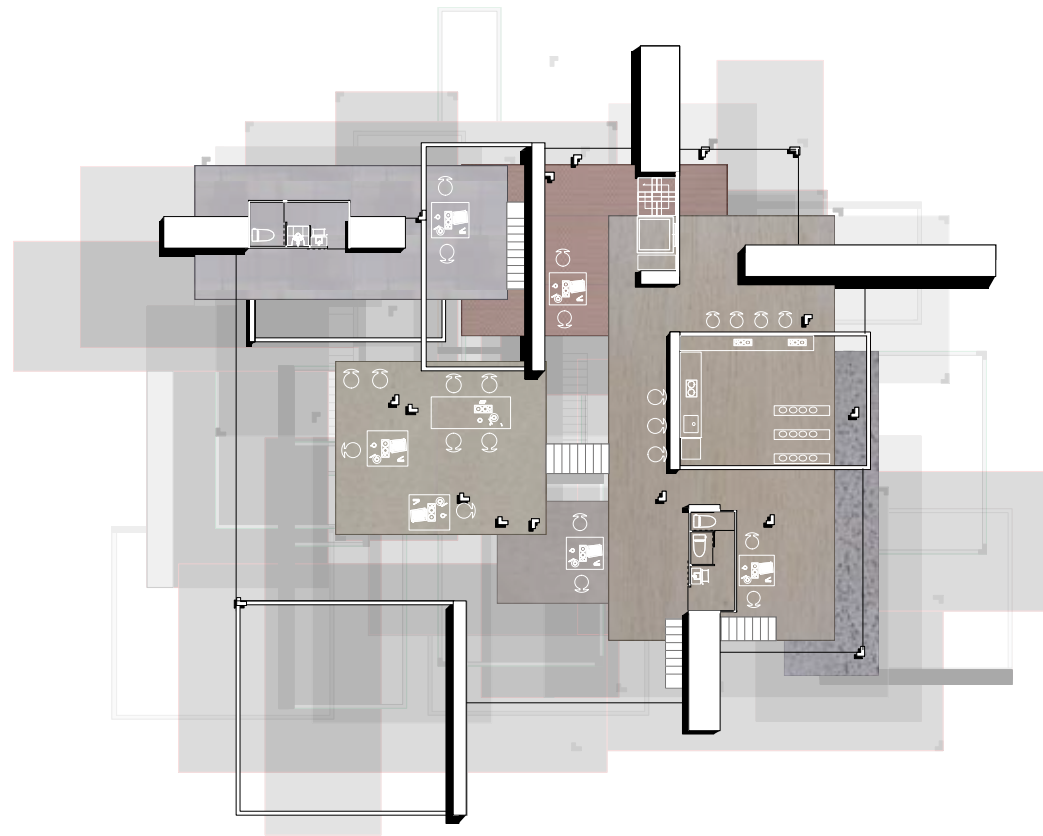


G.L. +12000 S=1:200

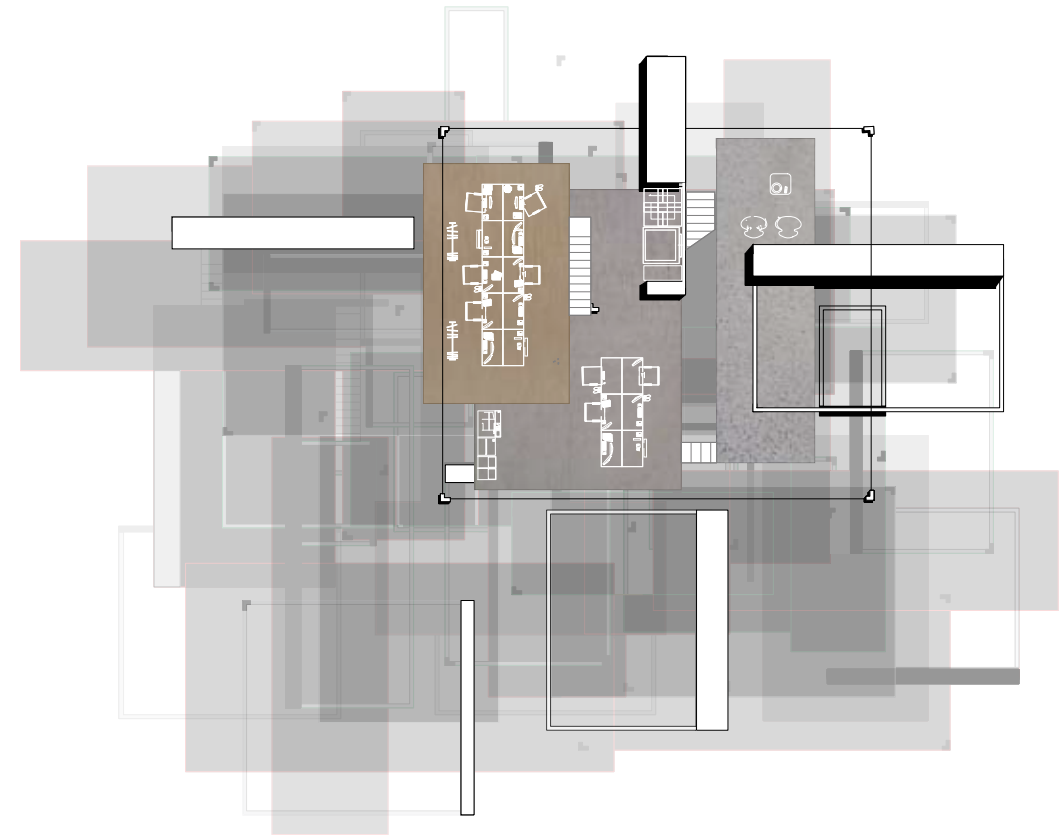


G.L. +16000 S=1:200

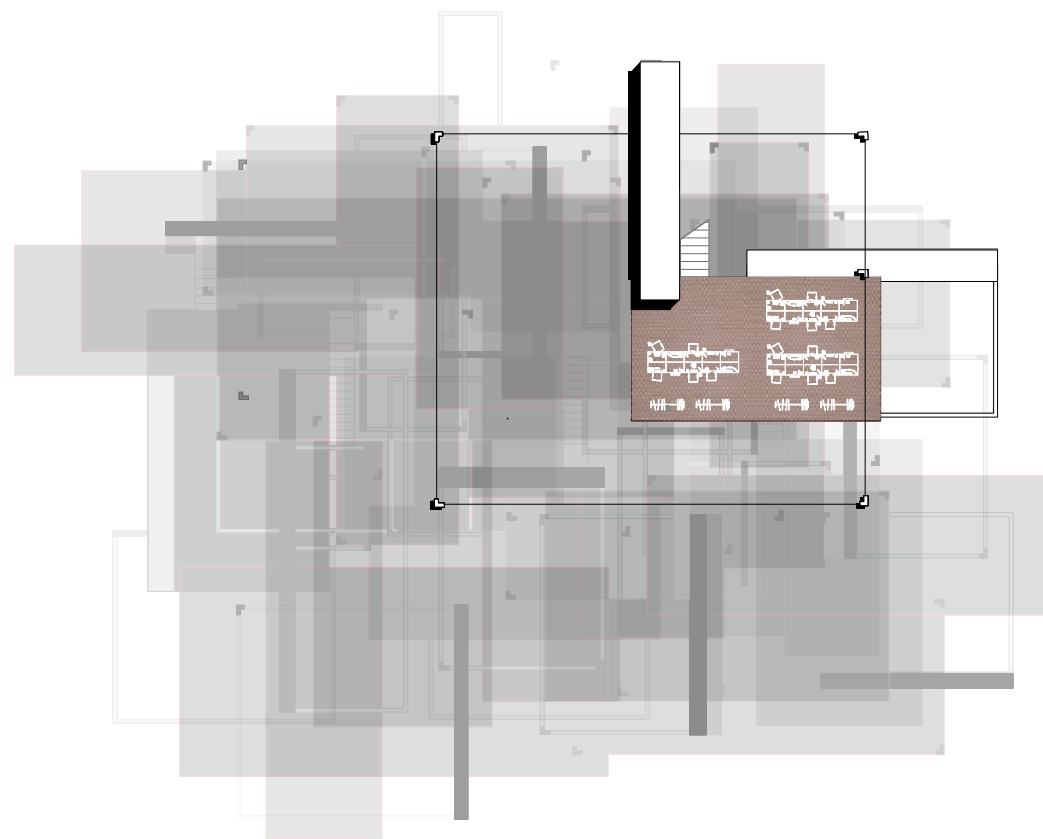
平面图



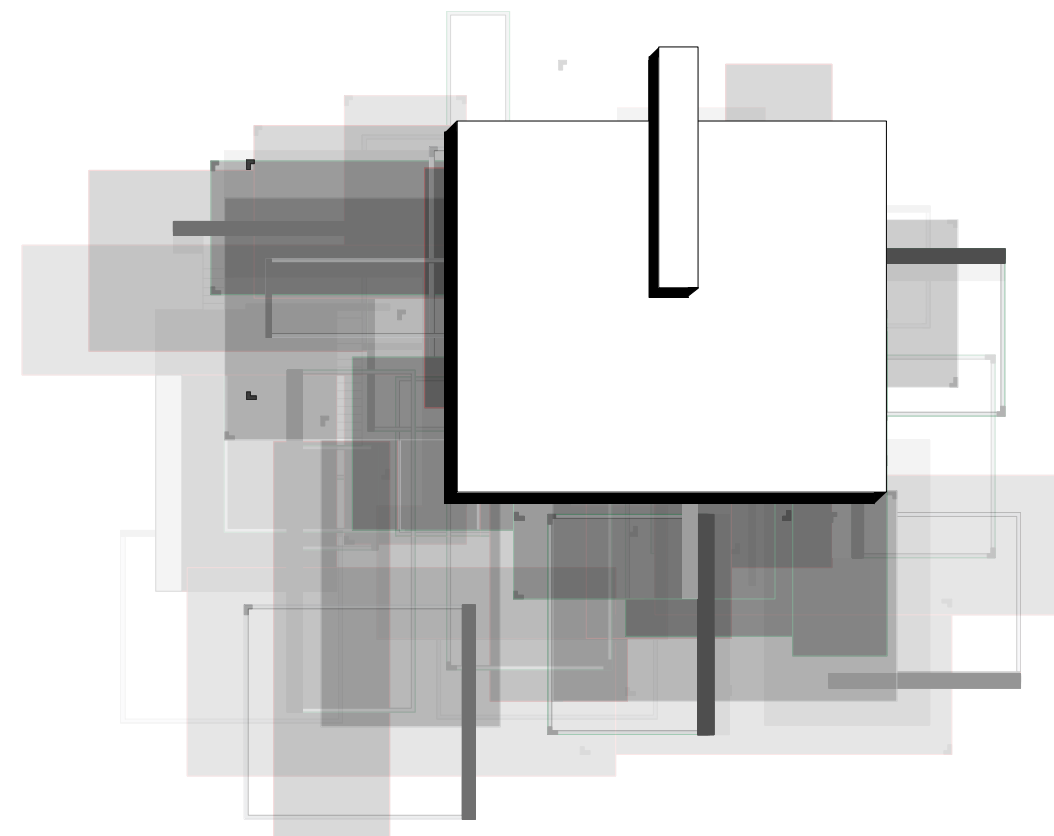
G.L. +20000 S=1:200



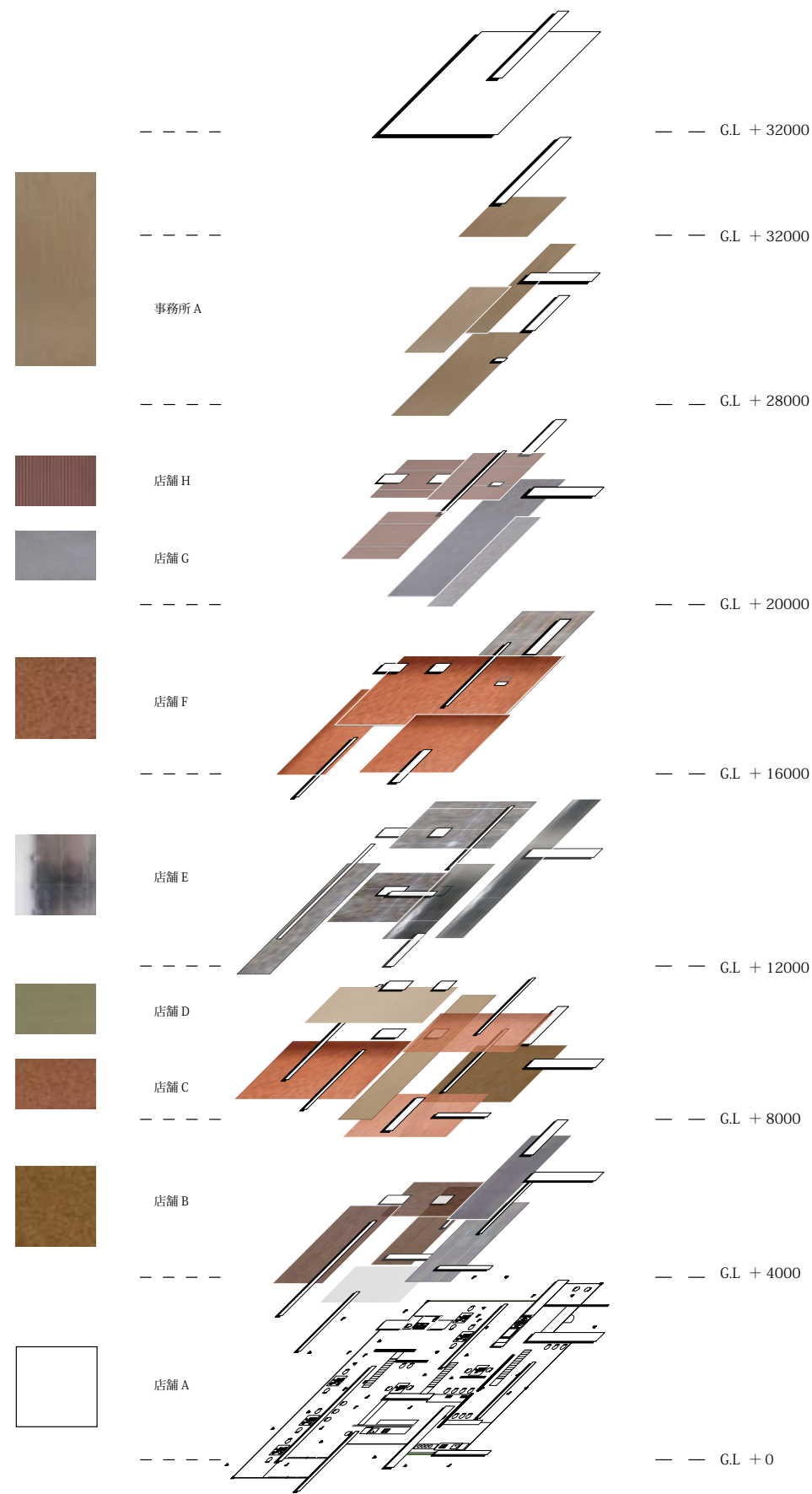
G.L. +28000 S=1:200



G.L. +30000 S=1:200



屋根伏せ S=1:200

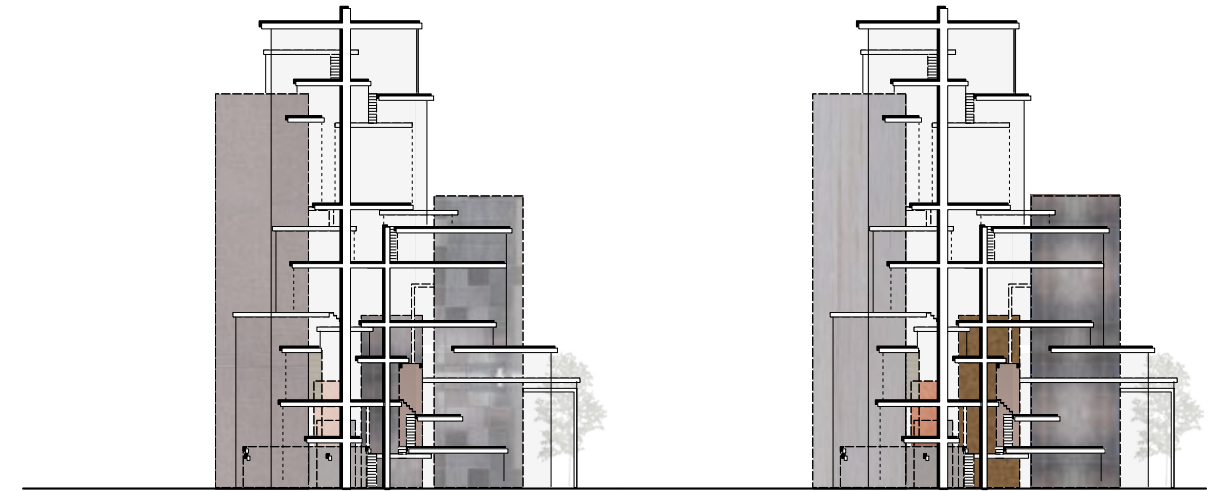


用途別素材分け

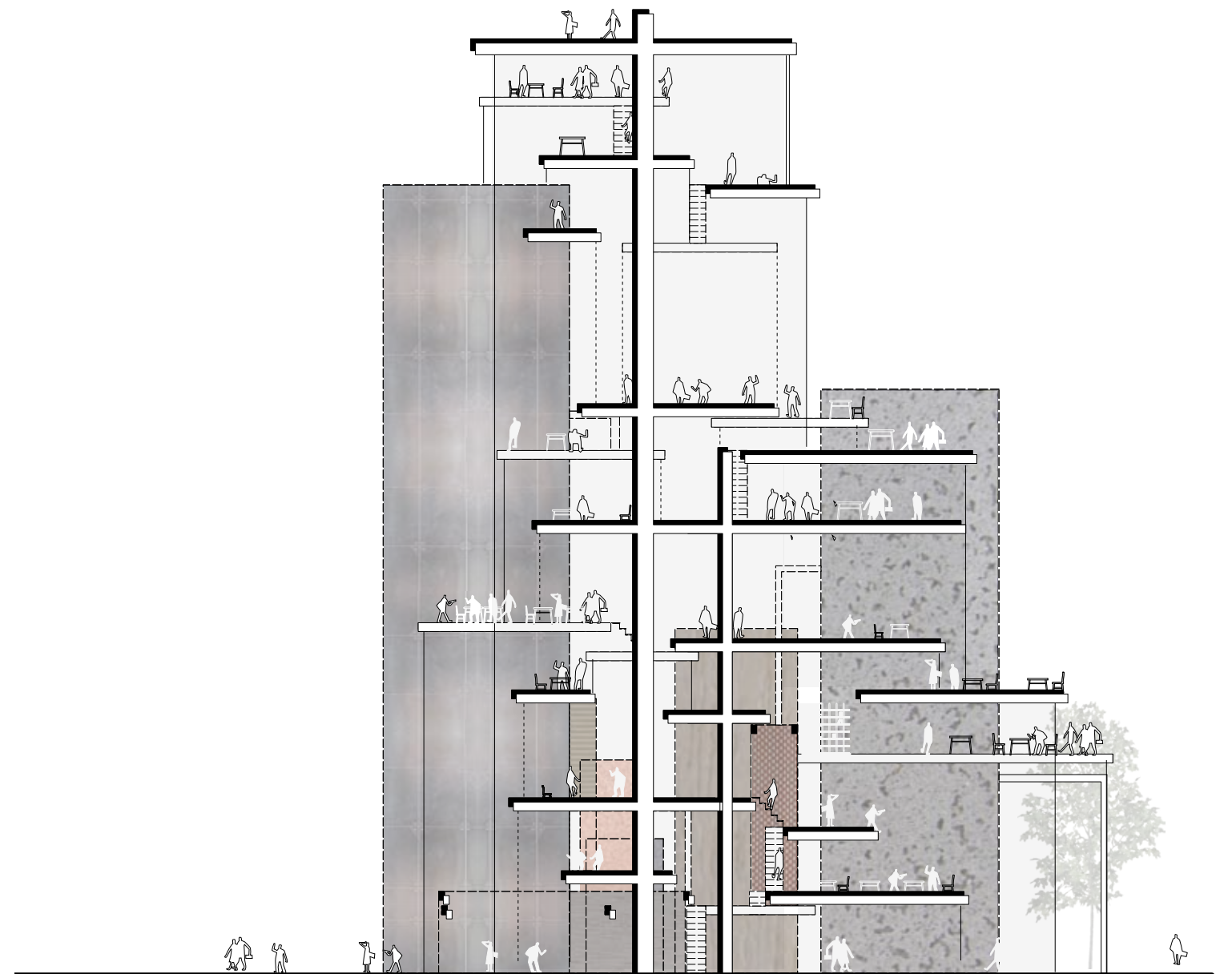
・ナビゲーション

高密度地域において、人の行動は殆どが構築物によって
アフォードされる。そこでは、構築物を覆う面が、人に
居場所を伝え、ナビゲートするサインが送られてくる。

断面図

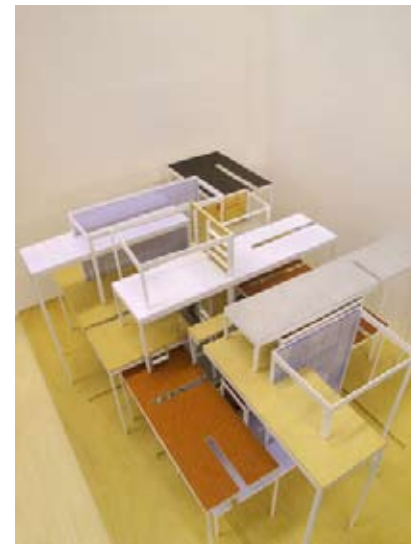


A-A' 見えがかり素材のスタディ

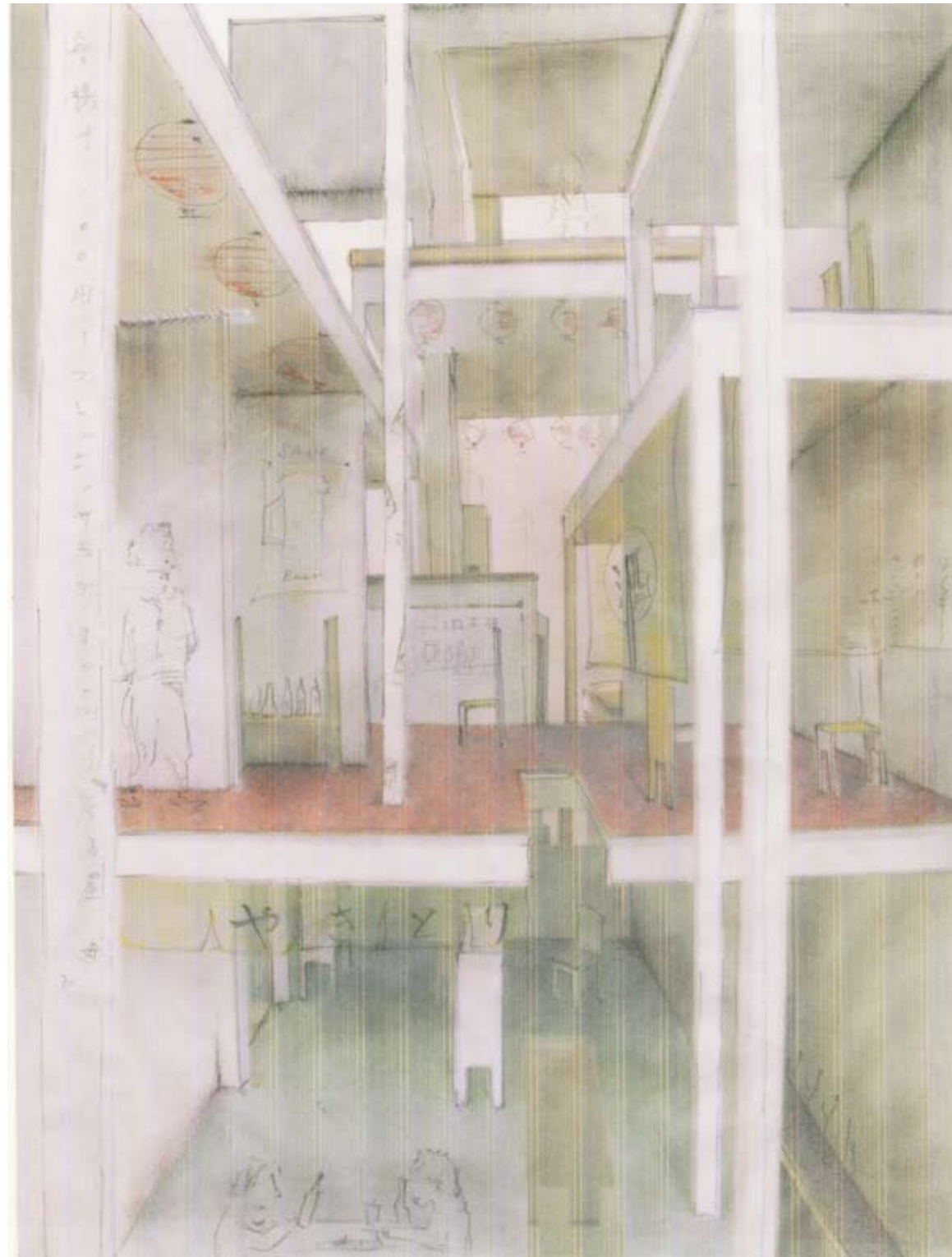


A-A' S=1:100

模型写真



スケッチ



おしまい

